論文

スティグマの社会学的理解

宮地あゆみ[1]

The sociological understanding of stigma

Ayumi MIYADI[1]

ABSTRACT

This paper considers stigma in modern society. In particular, it explores how and why ordinary people label someone as unusual. The paper seeks to clarify stigma conceptually and explain its constitution before addressing why labeled people are perceived as carrying stigma. By highlighting the present conditions of stigma, the problems associated with the stigmatization of people may be addressed.

キーワード　ラベリング，スティグマ，常識

Keywords: Labeling, Stigma, Common Sense

1. はじめに

幼い頃から両親や周りの大人達から言われてきた言葉や，絵本やテレビ番組などを通して見聞きしてきたことのなかに，「みんな一緒」「半分ずつ」「仲良くしようね」などという言葉がある。これらの言葉には，こども達が成長しこれから出会う人達との間で，『お互いを思いやり助け合うことの大切さを知り，優しい大人に成長して欲しい』と願う周りの大人達の思いが込められているのかもしれない。しかしその一方で，〈何か変わっている〉〈おかしい〉〈普通とは違う〉〈変な人〉と思われる人達を見かけたりすることがあると，「あっちに行っちゃだめよ」「見ちゃだめよ」「話をしちゃいけないよ」などと，こども達に言っている大人達の姿を見ることもある。私達はこのようにして，〈何か変わっている〉〈おかしい〉〈普通とは違う〉〈変な人〉と思われる人達に対して，その人達が自分達とは違う人間であるということも教えられるのだ。そうして私達は幼い時から，自分達と同様の〈普通〉と思われる人達に対する接し方と，自分達とは違う〈普通ではない〉と思われている人達に対する接し方との，両方の接し方を教えられるなかで育てられ成長していくのである。

一般的にスティグマとは，〈汚名〉〈烙印〉〈徴候〉〈徴〉などを意味している。また，スティグマ論で著名なゴッフマンは次のようにも述べている。「ことに人の信頼/面目を失わせる働きが広汎にわたるときに，この種の属性はスティグマなのである。この種の属性は欠点/瑕疵，短所，ハンディーキャップとも呼ばれる。」（ゴッフマン1970＝2009：15–16）とし，さらにゴッフマンは次のようにも述べている。「スティグマという言葉，およびその同義語は次のような二つの方向への展望を覆い隠す。その二つの展望とは，スティグマのある者は，自分の特異性がすでに人に知られている，あるいは人に見られればすぐに分かってしまうと仮定しているか，それとも彼は自分の特異性がその場に居合わせる人のまだ知るところとはなっていない，あるいはすぐには感知されるところとはならないと仮定しているのか，ということである」（ゴッフマン1970＝2009：18）。ここからいえることは，単にスティグマを〈徴候〉や〈汚名〉と捉えることによって，スティグマ化された人達の内実を覆い隠してしまうことであろう。また，ラベリング論で知られるベッカーは次のようにも言っている。「逸脱とは人間の行為の性質ではなくて，むしろ，他人によってこの規則と制裁と

[1] 891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科
Graduate School of Welfare Society, The International University of Kagoshima,8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan
2012年5月3日受付，2012年9月6日採録

が「違反者」に適用された結果なのである。逸脱者とは首尾よくこのレッテルを貼られた人間のことであり，また，逸脱行動とは人びとによってこのレッテルを貼られた行動のことである」(ベッカー1978：17)。この場合は，特定の意味でもある〈烙印〉をあてはめることと考えられる。本稿で展開されるスティグマ論は，スティグマを〈汚名〉〈烙印〉〈徴候〉〈徴〉などと意味しているなかの，〈徴〉の部分に焦点を当てて論じていきたいと考えている。「徴」とは広辞苑(新村2008：1822)によると，チ，チョウ，しるし，しるす，などという。意味としては，証拠，きざし，しるしなどがある。そのため本研究では，スティグマがあると見なされてしまう過程に注目をしていることから，〈徴〉とはどの様なものなのかについても考えて行くことで，スティグマについての考察を深めていきたいと考えている。

現代社会では，その人個人がもつ〈徴〉が，その社会のなかで誰もが憧れるものであれば，その人に対してマイナスのイメージをもって捉えられることは少ない。しかし，それがそうでない場合は，そのマイナスの特徴からなるイメージによるラベルが貼られ，その人の全体を言い表す「代名詞」となってしまうこともある。スティグマのある人達は，多くの場合，本人の意志とは関係なく〈普通でない〉人達とされる〈枠〉に入れられ，そのことで多くの可能性もが奪われてしまうこともある。そして，マイナスの影響は場合によっては家族や親戚までも含めた，周囲の人達にまで及んでしまうこともあり，その人達の生活をも危ういものにしてしまうこともあるのだ。このような状況になってしまうことが「スティグマ」と言える。またスティグマは多くの場合，その時代の国や文化のなかで産出され，私達の生活になかに〈制度〉〈常識〉〈規範〉などとして浸透して行く。

本研究では，〈普通ではない〉と思われている人達がどのような人達なのかについて考え，〈普通ではない〉と見なされるときに作用している〈常識〉にも注目をしていきたい。〈常識〉という言葉は，一見すると〈当たり前の見方〉と即断してしまうかも知れないが，実はけっこう奥深く複層的で多義的なものであろう。それゆえ，〈常識〉の複層性・多義性をさらに見ていく必要がある問題圏と認識したうえで，本稿では〈常識〉が誰にとっての〈常識〉なのかといった位相に着目していきたいと考えている。そして，〈普通ではない〉と思われる人達がこの社会のなかでどのようにラベルを貼られ，彼らがそのラベルのなかでどのようにして生きているのかを考察し，ラベルが貼られることが，その人達にとってなぜスティグマ〈枠〉となってしまったのかについて述べて行きたい。そしてそのうえで，現代社会におけるスティグマという概念そのものや，その成り立ちについても明らかにし，現代社会におけるスティグマの状況を浮き彫りにすることで，今後の課題へと繋げていくことを目指していきたい。

2. スティグマのある人達

本研究では〈普通ではない〉と思われる人達が，どのような経過のもとでスティグマがあるとされることになるのかについて，考察することを目的としている。そのために先ずは，「スティグマ」とはどのようなものなのかを明らかにする必要がある。

2.1. スティグマの由来

スティグマという言葉はギリシア語に起源をもっている。ゴッフマンによるともともとは，「それは肉体上の徴を言い表す言葉であり，その徴はつけている者の徳性上の状態にどこか異常なところ，悪いところのあることを人びとに告知するためのものであった。徴は肉体に刻みつけられるか，焼きつけられて，その徴をつけたものは奴隷，犯罪者，謀叛人――すなわち穢れた者，忌むべき者，避けられるべき者（とくに公衆の場では）であることを告知したのであった」(ゴッフマン2009：13)。

その後，スティグマの使われ方や意味は変化し，「二つの隠喩の層がこの言葉に加えられた。第一の層は，皮膚に口をぱっくり開けた形をとって肉体に現れた聖寵の徴を意味していた。第二の層は，この宗教的隠喩への医学的言及で，身体上の異常の肉体的徴候を意味していた」(ゴッフマン2009：13)。

そして現在のスティグマは，「最初のギリシア語の字義上の意味で広く用いられているが，不面目を表す肉体上の徴ではなく，不面目自体をいい表わすのに使われている」(ゴッフマン2009：13)。現代のスティグマの意味は，古代に使われていたスティグマの意味に再び戻っているようにも見えるが，その範囲が目に見える形のあるもの（手がないなどの身体的問題など）だけを指すものではなく，目に見えないもの（精神障害や犯罪者など）にまで拡大してきている。また，大谷も現代のスティグマについて，「古代のように身体に焼きごてを当てるような目に見える残酷なことはしないが，心に癒しがたい傷を負わせることにおいて見えないところで今も存在している」(大谷1993：iii)と述べている。

このように現在では，時代の変化に伴いスティグマの意味も変化し，古代のような肉体に直接スティグマをつけることはなくなってきている。しかし，直接スティグマをつける行為そのものはなくなっているが，「平等」や「対等」もしくは「同じ視点」などとする表面的な〈言葉〉の一方で，相反するメッセージとして「決してアナタは，私達の世界には入れないのよ」「アナタには無理ですよ」「アナタと私達は違うのよ」と言ったようなことを，〈表現〉〈態度〉〈雰囲気〉などによって伝えられている場合もあるのだ。そして，そのことで〈普通ではない〉人達にも自分達との間に差異があることを感じさせ実感させるなかで，〈普通ではない〉人達と〈普通〉の人達との間に，見えないがしかし明らかなものとして境界線を引くことにより，〈普通ではない〉人達の心のなかにスティグマとしての〈徴〉を刻み込んでいるのである。現代のスティグマは目に見える形があるスティグマだけではなくて，〈違和感〉や〈見た目の印象〉などとした目には見えにくいもの〈徴〉にまで広がって，現代社会のなかに根付いてきているのである。そのような，形のないスティグマ〈徴〉がある人達は多く存在し，形がなく目に見えないからこそスティグマ〈徴〉を取り去ることも困難となり，一段と深い傷としてその人達の心のなかに刻まれてしまうのである。

2.2. これまでのスティグマの研究

多方面で，スティグマに関する研究は行われている。そこでこれまでのスティグマの研究はどのようなものであったかを，ゴッフマン『スティグマの社会学―烙印を押されたアイデンティティ―』(1970＝2009)，クロセティ・スパイロ・シアシ『偏見・スティグマ・精神病』(1978)，坂本佳鶴恵『スティグマ―他者への烙印―』(1996)，田中理絵『家族崩壊と子どものスティグマ［新装版］―家族崩壊の子どもの社会化研究―』(2004＝2009) の先行研究から，スティグマとはどのようなものであり，どのようにして私達の生活のなかに浸透し根付いているのかを見ていきたい。そしてオルポート『偏見の心理』(1968) を通しては，偏見とスティグマとの関連性についても見ていくなかで，スティグマについての考察を少しでも深めていきたいと考える。

2.2.1. ゴッフマン (Goffman, E.) によるスティグマの研究

ゴッフマンの研究によると，社会は人々をいくつかのカテゴリーに区分する手段と，そのカテゴリーの成員に一般的で自然と感じられる属性のいっさいを画定している。さまざまの社会的場面が，そこで通常出会う人びとのカテゴリーをも決定している。状況のはっきりした場面では社会的交渉のきまった手順があるので，最初に目につく外見から，彼のカテゴリーとか属性を想定することができる。また，彼に適合的と思われるカテゴリーの所属が，望ましくない種類の属性であることも立証されることもあり得る。この種の属性がスティグマなのである。スティグマという言葉は，人の信頼をひどく失わせるような属性をいい表すために用いられるが，本当に必要なのは，属性ではなくて関係を表現する言葉なのだということである。スティグマの種類としては，肉体上の奇形が，個人の性格上の欠点，集団に帰属されるものなどがある。そしてスティグマのシンボルとしては，アイデンティティを損ない貶めるような不整合，その個人に対してわれわれが低い評価を与えることになるような記号のことをいう。あらゆる人が常人とスティグマのある者の双方の役割をとっており，この過程に参加しているということである。それは出会いを機会に作用することになる未だ現実化していない基準によって，さまざまな社会的場面で産出される。そして彼はほとんどあらゆる社会的場面でスティグマのある役割を演じなくてはならないかも知れない。しかしながら彼に特定のスティグマを与えている属性は，常人，スティグマの所有者の役割の性質を決定するものではなく，彼が演ずる頻度を規定しているにすぎない。さらに含意されているのは相互作用時における役割であり，スティグマのある人が他のスティグマのある人々へ抱く偏見が常人と同じであっても驚かないとも述べている（ゴッフマン1970＝2009）。

2.2.2. クロセティ (Crocetti, G. M.)・スパイロ (H. R. Spiro)・シアシ (I. Siassi) らによるスティグマの研究

クロセティらの研究によると，精神病者を世間がどうみるかという調査は，二つの対立するグループに分かれるとしている。それは，精神病を医療の援助を必要とする病気であるとした考えと，精神病を病気というよりもむしろ社会の逸脱の一つの形態として見ようとする考えのグループである。そのためここでは，いかにして矛盾した結論に至ったのかを検討している。ここでキーワードとなるのは「拒絶の理論」である。社会は安定を必要とするゆえ社会規範からの逸脱は脅威である。精神病理的行動は社会的逸脱の一形態で，その行動にふさわしい社会的規制が与えられる。このことから精神病者に対する否定的態度が生じる。否定的態度はステレオタイプ化

され，偏見はさらに進展する。偏見の対象である精神病者は，拒否・孤立・極端な社会的距離の維持などによってスティグマ化され，強く拒絶される。さらに，社会に信頼されたいという心理的要求が引き金となることが多く，そのために精神病者のスティグマ化と拒絶は激しいものとなるのである。「拒絶の理論」が正しいなら，精神病と精神病者に対する強固で，広くゆきわたったスティグマ化と拒絶はあるはずである。そうした背景による調査結果では，世間は精神医学的症状を精神病を示すものとして認識でき，精神病にかかっているとわかっている人との交際を否定していない。また，精神病者についての供述に対して，人間的で，啓蒙化された，処罰的ではない答えを述べ，元精神病患者と自分たちとの間には大きな社会的距離を認めてはいない。これらの態度は広く普及し持続され，若い層によってより広く受けとめられていた。そして，これらの肯定的態度は複雑で内部的に首尾一貫しており，精神病を識別する能力に関係がないことも分かってきた。従って「拒絶の理論」は，現在のところ実質的・実験的に認められないと述べている（クロセティほか1978）。

2.2.3. 坂本佳鶴恵によるスティグマの研究

坂本の研究によると，他人が自分にたいして「本当の自分」とは異なった決めつけをするのは，社会のなかでしばしば起こることであり，それは多くの場合が社会的偏見にもとづいていると述べている。レイベリングとスティグマは，他者による社会的決めつけという点で同じであるが，スティグマは，他者による社会的な特徴であり，それによって自分が期待していた敬意や信頼が失われてしまうものをさし，スティグマがあることで自分と他者との間で，自分がどのように評価されるべきかの価値判断が異なることを強調するときにしばしば使われている。またスティグマは，自分では変えることができない属性からきていることが多い。レイベリングとは，ある行動が原因となり決めつける（レッテルを貼る）行為に力点をおく概念である。他方スティグマは，人がかならずしも他者の期待にそって行動するとは限らないことを含意した概念である。差別の場合も人間としての価値観をおとしめられたと感ずることから，多くはスティグマをともなう。スティグマやレイベリングは，問題にかかわっている個人の立場に身をおき，その苦しさや改善すべきことがらを指摘していくというやり方である。レイベリングは，この社会的アイデンティティがもつ包括的な期待にそって，人が行動していく可能性を示し，社会が個人の主観に影響を与えることによって個人をコントロールしている側面を指摘する。スティグマは，個人が持つ自己のイメージを持ち込むことで，社会によってコントロールされるだけではない多様な戦略の可能性を示しそのことによって，かならずしも社会的な力に屈するだけではない個人の存在という，新しい社会と個人との関係を示したのであると述べている（坂本1996：35–50）。

2.2.4. 田中理絵によるスティグマの研究

田中の研究によると，スティグマは日本では，日常の生活場面のなかでそれほど浸透してはいなく，われわれが耳にする「スティグマ」という用語は，むしろ「レッテル」という用語であろうと述べている。そして家族崩壊を経験した子どもは現代社会において，「子どもにとって家族内での社会化か重荷である」という常識が根付いているため差別的な扱いを受け，共通する類似した社会化過程を辿ることによって，その社会に共有される価値・判断・行為基準などを習得し，内面化し，自己をスティグマ化させるというアイロニカルな立場に立たされる。そして社会の〈正常〉な成員となる過程で，自己を〈異常〉なものとして見なすようになるのである。それは「自己の〈普通〉さを確保し，そのことを他者に認められるために，〈異常〉な自己を引き受ける」というアイロニカルなパラドクスを抱え込み，また自分達に欠けているものは「普通」で「平凡」なものであり，したがって根本的なものが欠けていると考えるのである。そしてそれが自己のスティグマ性を引き受けてしまう理由でもあった。彼らがスティグマ化され，あるいは自己のなかでスティグマ化するのは，彼らが言うところの「普通の人」のパースペクティブと，スティグマを帯びたパースペクティブの双方を同時に内包するからである。そして今後の課題の一つとして，この2つの対立的な態度を互いに矛盾するパースペクティブを統一するような，特性をもつ理論を展開させなければならないと述べている（田中2004＝2009）。

2.2.5. オルポート（Allport, G. W）による偏見の研究

オルポートの偏見の研究は，スティグマ化のもたらす種々の結果を考察する場合にとても示唆的であるので，ここで少し言及しておくことにしたい。オルポートによると，偏見や迫害は決して少なくない割合で宗教から派生しているが，敵対心をもち差別を行なうのは個々の人々に他ならないとし，「因果関係」は広義で社会文化的原因や個人的態度に見られる直接原因に至るまでをも包含しうるのであるとしている。偏見とは，実際の経験

より以前に，あるいは実際の経験に基づくかないで，ある人とか物事に対してもつ好きとか嫌いとかいう感情であり，多くの偏見が自己満足的な配慮によって保持される。そして偏見の現実としては，ほうび→回避→差別→身体的攻撃→絶滅の5つの段階がある。偏見の構成は一般化，概念，カテゴリーなどの形成において，正常で自然な傾向で単純化されている。レッテルが貼りつけられる場合には，カテゴリーとしてまとめられる傾向がある。ステレオタイプは，偏見を正当化しようとする個人によって求められたカテゴリーのなかのイメージであり，普及している偏見の性質とか事態の要請とかに調子をあわせている。心理的な原理は偏見の過程を理解するのに役立つが，理由を充分に説明することはできないため，一つ一つの事例の歴史的文脈を知ることによってのみ得られるというのが結論である。差別や偏見は社会構造的事象と人格構造的事象なのかにあり，差別は現行社会体系と密接なつながりのある世間の文化的慣行を扱うが，偏見はパーソナリティの態度構造を問題としている。両方は同時に表われて一つの事象の部分を形成するので，多角的なアプローチが必要である。そして是正プログラムとしては，社会構造の変革に力を入れるもの及び人格構造の変容に力を入れるものの二つの類型があり，これらのプログラムは相互に関連しがちでもあると述べている（オルポート1968）。

2.3. 先行研究から伺えてきたこと

これらの4つのスティグマ研究によると，スティグマとは社会と個人との関係のなかで個人が持つ自己のイメージにより，他の人達の持つシンボルや属性，または共通する類似した社会化の過程をたどっているなどによりカテゴリー分けを行い，その人達のアイデンティティを損ない貶め敬意や信頼が失われてしまう記号〈徴〉のことをいうとされていた。また，スティグマへと繋がっていく過程でのカテゴリー分けは，個人の持つ常識という価値観のもとでの臆見としての，価値・判断・行為基準などによって行われていた。これらを言い換えれば，私達は日常生活のなかで初めて出合った人達に対して，その時のその人の持つイメージから，その人の特徴を，その特徴にあった属性のカテゴリーにあてはめるのである。そしてその属性が望ましくない属性である場合がスティグマとなり，その人の敬意や信頼をひどく失わせることに繋がっていくのである。またスティグマとカテゴリー化の過程は密接な関連があり，多くの場合スティグマは個人では取り除くことが困難であるとされていた。またオルポートによると，偏見の現実としては5つの段階があり，偏見の構成は一般化，概念，カテゴリーなどの形成において単純化される。そしてマイナスのレッテルが貼りつけられる場合，その属性に応じたカテゴリーにまとめられる傾向があるとしている。偏見の過程を理解するためには，一つ一つの事例の歴史的文脈を知ることによってのみ得られるともしており，解決には多角的なアプローチが必要であると述べられていた（オルポート1968）。

これらの研究結果からして，スティグマは個人の持つ〈常識〉とされる価値や判断および行動基準が影響し，カテゴリー分けを行うなかで発生していることが分かって来た。そのため本研究では，これまでの研究から浮かび上がってきた〈常識〉についても見ていくなかで，私たちの生きている時代の国や文化のなかでの〈常識〉とはどのようなものであり，スティグマ〈徴〉とどのように関連しているのかを考察していきたい。そしてまた，こうした人達の持つ〈常識〉により，他の人達にスティグマ〈徴〉があると見なすことにも繋がっていく，カテゴリー分けとスティグマ〈徴〉の関連性についても整理をしていきたい。

3. 偏見とスティグマと差別

これまで述べてきたスティグマという概念をもとにして，スティグマとはどのような経緯のもとで起こる現象であるのか，スティグマのある人達がどのような経過をたどることになるのかについても整理をしていきたい。

3.1. 〈常識〉と偏見

私達は生まれてから現在（？歳）までの間，様々な経験や価値観のなかで自分達の日常生活における〈常識〉を築いて生きてきている。たとえばA子は咳が出て，悪寒がし微熱があるために，週末に計画していた旅行に行けなくなるのではと考えたすえ，内科を受診し風邪薬を処方してもらった。そして，処方された薬を服薬した結果，体調はもとにもどり週末には計画どおり旅行に行くことができたのである。A子はこのように過去の経験にもとづいて，『体調を崩したことで，旅行にはいけなくなる』と考えて，現在の自分の状態を把握している。そして『風邪をひいた時は内科を受診する』とした経験から受診を行い，『服薬によって完治する』とした結果をもとに処方薬を服薬し，無事に旅行に行くことができたのである。このように私達はこれまでの経験を通して，『風邪をひいた時には病院に行くとすぐに治る』と

する〈認識〉を持っている。そのためB男，C子，D男・・・も同じ状況になると，「咳や悪寒がし微熱がある」→「内科を受診する」→「処方薬を飲む」→「完治する」という構図を描くのであろう。そう考えると，この構図はA子だけが経験した結果からなる，価値観による経過予想図ではなく，A子と同じ時代の国や文化で育った人達の大半が，同様の経過をたどることを当然のこととする〈価値観〉を持ち，それを〈常識〉として認識しているのである。

もしもここで，B男が「内科」ではなく「産科」を受診したとする。するとB男は，「馬鹿じゃない」「診てもらえるわけないじゃない」「なに考えているの」などと周りの人達から言われるかもしれない。もしかすると，受診先の病院でも診察を断られる可能性もあるだろうし，冷ややかな目で見られることもあるかもしれない。このように，A子のような症状の場合には，「内科」を受診する事が〈常識〉であるとされる。またC子は「薬を飲むよりもアルコールを飲んだ方が元気になるから」とか，「昨日あまりアルコールを飲まなかったから調子が出ないところかも」と言ってアルコールを飲んだとする。するとC子は周りの人達から，「アルコールを飲んでも治らないよ」「飲むから体調を崩すのよ」「これではきっと，週末の旅行には行けないね」「そんなのでは何も変わらない」「このままではC子の人生はダメになる」などと言われるかもしれない。この場合には内科を受診することや，服薬をすることが〈常識〉であるとした認識の違いを超えて，C子は『アルコール依存症になるかもしれない』と周りの人達から思われてしまう場合もあるのだ。

このように私達は〈常識〉とされること以外の行動を取った場合，他の人達から普通ではないと思われてしまうのである。〈常識〉とはその人の存在している時代や国や文化によっても異なるものであり，〈常識〉は常に時代や場所などによって変化するものでもあるのだ。そして私達は常に，その時代の国や文化のなかで〈常識〉とされるものを，〈感覚〉として身につけるように，身近な人達や，社会やマスメディアなどを通して教えられるなかで育てられているのである。そして，このようにして身についた〈常識〉や〈感覚〉からズレている人達に出会うと，私達は〈何か変わっている〉〈おかしい〉〈普通とは違う〉〈変な人〉というような違和感をもつようになるのであろう。そのような〈常識〉との差異の結果，私達のなかに「偏見」は生まれてくるのではないかと思われる。オルポートは偏見について，「実際の経験より以前に，あるいは実際の経験に基づかないで，ある人とか物事に対してもつ好きとか嫌いとかという感情である」（オルポート1968：6）とし，「偏見とは，ある集団に属しているある人が，たんにその集団に所属しているからと，それゆえにまた，その集団のもっている嫌な特質をもっていると思われるとかという理由だけで，その人に対して向けられるけんおの態度，ないし敵意ある態度である」（オルポート1968：7）と述べている。

3.2. カテゴリー分けによるラベリング

先に述べたように私達は〈普通ではない〉と思われている人達に出会うと，その人のもつ特性がこれまでに得て来た〈常識〉とは違うと感じとり，感じとった〈感覚〉をもとにして，その人達は〈普通ではない〉人達であると〈認識〉することで，その人の特徴にあわせてパターン化する。そしてそのパターンによってカテゴリー分けをするなかで，私達は〈普通ではない〉とされる人達をイメージとして捕えようとするのである。オルポートは，私達の生活のなかで無意識のうちに行っているカテゴリー分けについて，「思考するには，カテゴリーの助けによらねばならない（カテゴリーという語は，ここでは，一般化と同義である）。一度，形成されたカテゴリーは正常な予断の基礎となる。とてもこの過程を避けることはできまい。秩序だった生活はカテゴリーに依存している。カテゴリー分けの過程は，次の五つの重要な特徴を備えているといえよう」（オルポート1968：16–17）と述べている（オルポートの述べた，カテゴリー分けの「五つの重要な特徴」については，表1に示している。）。

表1に照らしあわせて，カテゴリー分けの「五つの重要な特徴」を例えるなら，（I）では，街中で独り言を言いながら歩いてくる人に会うと，あの人は何かおかしいと捉えるような，過去の経験によってカテゴリー分け行うことなどが含まれる。（II）では，普通ではない様子から，おかしな人物かもしれないから，気を付けようと判断することなどが含まれる。（III）では，その人が近づいてくると距離をとろうとして道の端っこを歩いたり，脇道にそれたりするなどして，もしも問題が起きた時に巻き込まれないようにするなどの行動をとることがあてはまる。（IV）では，『自分が問題に巻き込まれるかもしれないから，こんな人は嫌いだ』『独り言を言っているのは，感じが悪い』などのように，本来の意味のほかに感情的なものが含まれることを示す。（V）では，もし何か問題が起きたら先ほど通った交番まで駆け込め

表1　カテゴリー化の五つの重要な特徴

	I	II	III	IV	V
カテゴリー化の段階	・この過程は，われわれの日常の適応の指標となるような大きな組や群を形造する。	・カテゴリー化は，できうるかぎり，群に同化していく。	・カテゴリーは，関連した対象をすばやく同一視することを可能にする。	・カテゴリーは，同じ理念的ひびき，及び情動的ひびきを，そのカテゴリーが含むすべてのものに染み込ませる。	・カテゴリーは，多かれ少なかれ，合理的なものであろう。
カテゴリー化の内容	・われわれはこの適応のために以前に形成したカテゴリーを想起しながら，目のさめているうちの大半を過ごしている。	・思考には奇妙な慣性がある。我々は手軽に諸問題を解決したいと思う。	・あらゆる事象は，ある目印をもっている。それは余談のカテゴリーを行為にまで導く手がかりとして役立つ。	・いくつかのカテゴリーは，ほとんど純粋に知的なものである。多くの概念は「意味」のほかに，一つの特徴ある「感情」をもっている。この概念にもとなって好き嫌いの感情的なひびきを持つ。	・一般的に，カテゴリーは「真実の核心」からでき上がり始めるものだといわれている。合理的なカテゴリーがそうであり，関連的な経験の増大によってカテゴリー自体が拡大し，かつ固定してくる。

※オルポート1968：18–21を参考に筆者が作成した。

ば警察が対応してくれるだろうと考えるような，合理的なカテゴリーに沿って捉えることや，経験を通して少しずつカテゴリーの選択肢が広がっていくことなどが当てはまる。

このように私達は，〈普通ではない〉人達を即座にパターン化し，カテゴリー化の過程を通して物事を捉えることにより，私達の過去の経験や知識などと関連させ，そのタイプ〈特徴〉の人達が自分にとって安全かどうかを，判断しやすくしようとするのである。そしてパターン化するなかで，〈普通ではない〉と思われる人達との差異を明確に認識しやすくするために，そのカテゴリーに名前をつけてラベルを貼るのである。このようにして私達は日頃から無意識のうちにカテゴリー分けを行い，そしてそれらに貼りつけられたラベルに応じた対応や回避をするなかで，日常生活を送っているのである。

またラベルが貼られやすい人達は，主に「少数派」＝「マイノリティ」的集団に属していることが多い。新保はマイノリティとは，「集団の規模は小で権力も持たない集団」（新保1972：15）であると述べている。そしてその人達にラベルを貼るなかで，現在もスティグマは私達の生活のなかに根深く浸透しつづけているのである。しかも，ラベルを貼られた人達は本人の意志とは関係なく，その立場に否応なしに追いやられていくのである。そしてその人達が本来持っているはずの問題回避能力や発言力までをも失わせ，スティグマの渦中から抜けだすきっかけを得る可能性をも減少させている場合もあるのだ。

4.　スティグマの仕組み

4.1.　生み出される逸脱者

現在のスティグマは，古代のスティグマのように目に見える〈烙印〉ではなく，目には見えにくいものとして現代社会のなかに存在し続けている。まさにそのような点からして現代のスティグマは〈徴〉と捉えることができよう。そしてそのスティグマ〈徴〉がある人達は，そのようなスティグマ〈徴〉のない人達によって作られた制度〈枠〉のもとで，管理されていくのである。そのことにより一定の〈常識〉や〈基準〉から外れた人達を，それぞれの特徴にあわせてカテゴリー分けをおこない，ラベルを貼ることで〈普通〉の人達との間にある境界線を明確にしていくかもしれない。

このようにして私達は，一定の〈基準〉から外れた人達を逸脱者として見ることになるのである。ベッカーは「アウトサイダー」＝「集団規則からの逸脱者」であるとして，「あらゆる社会集団はいろいろな規則をつくり，それをその時々，場合場合に応じて執行しようとする。社会の規則は，さまざまな状況とその状況にふさわしい行動の種類を定義し，個々の行為を「善」として奨励し，あるいは「悪」として禁止する。ある規則が執行された場合，それに違反したとおぼしき人物は，特殊な人間――集団合意にもとづくもろもろの規則にのっとった生き方の期待できない人間――と考えられる。つまり彼は，アウトサイダーと見做される」（ベッカー1987：7）と述べている。

そして私達は一定の〈基準〉から外れた人達に対して，クロセティらが述べているように「否定的態度がその保持者の心理的欲求を満たす時，その態度はステレオタイプ化された物になり，疑いの余地のないものとなる――

要するに強化された偏見となるのである。こうした偏見の保持者は，偏見を持たされている人々をスティグマ化し強く拒絶し，彼らからできる限り社会的距離を保とうとする」（クロセティほか1978：42）のかもしれない。

4.2. 今後のスティグマ研究の方向性

本研究の結果によると，〈常識〉とはその人達の存在している時代や国や文化によって異なり，〈常識〉は常に時代や場所などによって変化するものである。そして私達は常に，その時代の国や文化においての〈常識〉を，〈感覚〉として身につけるように，身近な人達や，社会，マスメディアなどを通して教えられるなかで育てられているのである。そして，このようにして身についている〈常識〉や〈感覚〉からズレている人達に出会うと，自分達とは違うとした違和感を持つのである。そしてその人達を〈普通ではない〉として即座にパターン化し，カテゴリー化して捉えることにより，私達の過去の経験や知識などと関連させ，そのタイプや特徴の〈徴〉を持つ人達が自分達にとって安全かどうかを，判断しやすくしようとするのである。そしてこのようにパターン化するなかで，〈普通ではない〉と思われる人達との差異を明確に認識しやすくするために，そのカテゴリーにラベルを貼るのである。現在のスティグマは，目には見えにくいものにまで拡大して存在し続けており，そのスティグマ〈徴〉がある人達は，そのようなスティグマ〈徴〉のない人達によって作られた制度〈枠〉のもとで，管理されているのであり，またそして，スティグマがある人達はその役割を演じるように求められているのかもしれない。

このようにスティグマとは，主としてスティグマがある人達とは対極に位置づけられる〈普通〉の人達によって付与されるものである。また，スティグマがある人達は，多くの場合マイノリティ的集団に属する人達でもあり，その社会における弱者であることもわかった。さらにスティグマにより，その人達の人生や生活における選択肢は大きく制限されてしまうこと，場合によっては，その人達の家族や親戚にまでにもその影響が及んでしまうのである。一旦スティグマがあるとみなされてしまうと，それによっておこる負の連鎖からは簡単に逃れることはできないようである。私達は，いつの時代も社会のなかにスティグマがある人達を産出し，自分達の持つ〈常識〉や〈価値観〉を正当化してきたのかもしれない。それらの結果，スティグマは一般の人達の生活のなかに根深く浸透し，現在も存在し続けていると思われる。そしてまた，スティグマ化された人達も自らのアイデンティティの維持のため自らのスティグマを〈普通の人〉とともにいわば共謀的に維持するということもあるのだ。

現代のスティグマは，人種，民族，宗教，学歴，職業，障害，病気，犯罪……など，社会諸事象の各位相のなかに数多く見出される。それゆえ，スティグマ研究は，こうした各位相で可能となるわけであるが，一人の人間が遂行できるスティグマ研究には限りがある。筆者のこれからの研究の方向性としては，こうしたさまざまなスティグマの概念論や実証的研究の成果を継承して，「精神障害者に関するスティグマ研究」に向かっていくつもりである。筆者はこれまで「過去50年にわたる精神障害者の偏見およびスティグマに関する研究論文」の分析を行ってきた。これまでの先行研究では，質的研究と量的研究が相互影響的に関連し合いながら進められてきている。その結果によると，精神障害者に対する偏見やスティグマの解消のための量的研究の動向は，第1測定法期（1960～1980年），第2測定法期（1981～1994年），第3測定法期（1995年～現在）の3つの時期に研究の段階が分けられ，測定法については大きく分けると5つが開発されている。それらの研究の結果からは，対象者の属性に合わせた啓発活動が有効であることも分かってきた（宮地2012）。そして今後の研究の方向性としては，精神医療福祉の歴史学研究を行うなかで，精神障害者がなぜ現在スティグマの渦中にあるのかを読み解き，可能ならば精神障害者のスティグマの解消ないし軽減に向けての具体的方途を見出して行きたいと考えている。

5. 結びにかえて

ベッカーの『アウトサイダーズ』のなかに，「わしゃ，ときどきわからなくなっちまうんだが，どうして他人のことを気違いだなんていい切れるのだろう。人間にゃ，ほんとうの気違いもほんとうの正気も一人だっていやしない，ただほかの連中がそういったからそう決まっちまうだけのことだって，ときどきそんな気がするんだ。そいつが何をやるかというより，まわりの連中がそいつをどうみるかってことで決まっちまうらいしんだな」（ベッカー1987：1）という一文がある。私達は，自分達の感覚として持つ〈常識〉から外れた人達がいると，これまでの価値観のなかから，その人達にあてはまるであろう属性にあてはめて見てしまう習慣がある。その結果，私達は自分達とその人達との〈違い〉や，何かおかしいと感

じとった〈違和感〉に対して，即座に対応しようとするのである。しかし，それはもともと私達のなかに〈常識〉や〈基準〉とされるものがあり，それとの差異に対して無意識のうちに合理的に判断をしているにすぎない。そして，その人達との間にあると思われる境界線を明確にするためにラベルを貼るのである。

もし，この〈違い〉や〈違和感〉を感じとらせる対象者が，メジャーリーグに憧れてそれを目指す野球選手である場合にはどうであろか。メジャーリーグを目指すために，生活そのものが目標達成のための生活になると思われる。人付き合いよりもトレーニングが優先で，食事も一種のトレーニングであるため，私達と同様にその時の状況や気分によって食事をしているわけではないかもしれない。これも明らかに〈普通ではない〉と言える。しかし，彼は〈普通ではない〉からといって，スティグマをあたえられることはないであろう。それは彼に〈違い〉や〈違和感〉があると感じたとった私達が，彼の持つ特性がマイナスの特性ではないとする属性にあてはめた結果，スティグマとしては捉えていないためなのかもしれない。だが，私達は日々の生活のなかでマイナスの特性を持つ人達に対して，当たり前のようにラベルを貼り，スティグマがあると見なしてしまうのである。しかしその前に，私達は自分達の持つ〈常識〉や〈基準〉とする価値観の見直しをする必要があるのではないだろうか。しかし，現代社会のなかでは，他人とは違う価値観をもっていること自体が，〈普通ではない〉人達，逸脱者とみなされてしまう可能性もおおいにある。ときどき，『私と小鳥と鈴』（金子1998：81）の詩になかにある「みんなちがって，みんないい」といった言葉を，目にすることや耳にすることがある。しかし私達は本当に，自分達とは違う〈個性〉や〈特徴〉などを受け入れられるのであろうか。この詩からも，私達が幼少期に大人達に教えられた「みんな平等」「半分ずつ」「仲良くしようね」とする言葉の背景にある，本音と建前の二面性のようなものを感じさせられ，そしてまた何か考えさせられるものがあるようにも思えてくる。

謝辞

本論文の執筆にあり，鹿児島国際大学の佐野正彦教授にご指導いただきましたことを心より感謝申し上げます。

注

1）オルポートは，ステレオタイプの定義として「好意的であろうと非好意的であろうと，とにかく，ステレオタイプは，カテゴリーと結びついた，誇張された所信である。その機能は，そのカテゴリーに関してのわれわれの行為を正当化する（理屈づける）点にある」と述べている（オルポート1968：162）。

文献

ベッカー，H. S.（村上直之訳）（1978）.『アウトサイダーズ』東京：新泉社.

ゴッフマン，E.（石黒毅訳）（2001）.『スティグマの社会学―烙印を押されたアイデンティティ―』東京：せりか書房.

金子みすゞ（1998）.『金子みすゞ童謡集』東京：角川春樹事務所.

クロセティ，G. M.・H. R. スパイロ・I. シアシ.（加藤正明監訳）（1978）.『偏見・スティグマ・精神病』東京：星和書店.

宮地あゆみ（2012）.「量的研究から見た偏見解消の歴史―過去50年による先行研究の測定分析を通して―」『九州社会福祉学年報』，3: 27–37.

大谷藤郎（1993）.『現代のスティグマ―ハンセン病・精神病・エイズ・難病の艱難―』東京：勁草書房.

オルポート，G. W.（原谷達夫・野村昭共訳）（1968）.『偏見の心理』東京：培風館.

坂本佳鶴恵（1996）「スティグマ―他者への烙印―」，友枝敏雄・竹沢尚一郎・正村俊之・坂本佳鶴恵『社会学のエッセンス［新版］』東京：有斐閣.

新村出（編）（2008）.『広辞苑　第六版』東京：岩波書店.

新保満（1972）.『人種的差別と偏見』東京：岩波書店.

田中理絵（2009）.『家族崩壊と子どものスティグマ［新装版］―家族崩壊の子どもの社会化研究―』福岡：（財）九州大学出版会.

（みやぢ あゆみ：大学院福祉社会学研究科博士後期課程）